



環境保全活動の現場に 来たれ! 若者たち



ごみであふれかえっていた音楽フェスティバルの会場が、エゾロックの活動によりポイ捨ての少ないきれいな会場に生まれ変わった

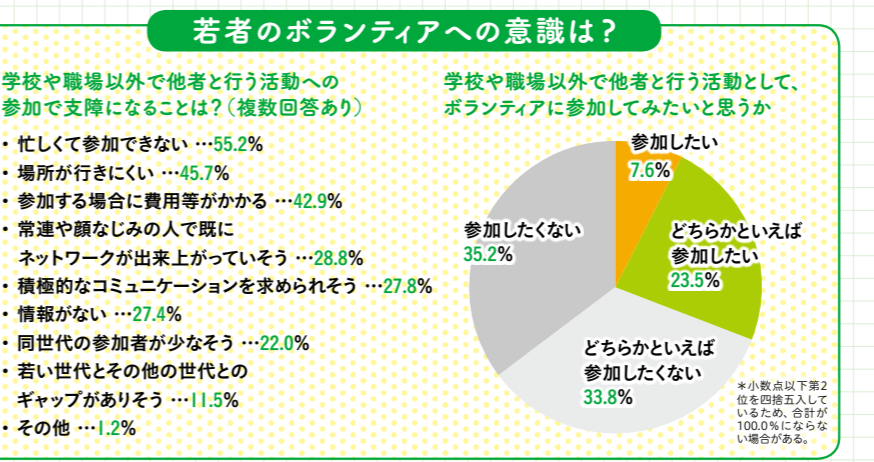
近ごろ環境保全活動の現場で「若者が少ない」「後継者がいない」などの声がよく聞かれます。実際に「平成29年度特定非営利活動法人に関する実態調査」では、多くの団体が課題として「人材の確保や教育」(66.9%)、「後継者の不足」(38.8%)を挙げています。もっと多くの若者に参加してもらうには、今、どんな変化が求められているのでしょうか。多くの若者とともに活動する特定非営利活動法人エゾロック代表理事・草野竹史さんに、自らの経験から若者を巻き込む取り組みについて聞きました。

総括インタビュー

オンラインを活用して メンバーの情報共有を図る

私たちの団体「エゾロック」は、10〜30代の若者が中心の環境NPOです。会員数は約300人。札幌近郊の若者を北海道内各地に送り、地元と連携して地域課題の解決に向け取り組んでいます。2017年度は延べ活動日数356日。広い北海道のどこかで毎日エゾロックが活動していたことになりました。18年度は胆振東部地震の被災地でもさまざまな活動を展開しています。当団体はもとも北海道最大級の音楽フェスティバル「ライジングサンロックフェスティバル」の環境対策活動からスタートしました。今もそれが活動の柱ですが、他にも道内全域で複数のプロジェクトを進行しています。会員はそのとき募集している単発のボランティア活動に参加するか、より深く活動に関わりたい場合はプロジェクトの中から関心のあるものを選んでメンバーになり、活動の企画から準備、現場運営まで年間を通して一つのプロジェクトに携わることもできます。

毎日夕方になると、事務所には仕事や学校を終えたメンバーが集まってきて、プロジェクトごとに会議が始まります。全員ではありませんし、毎日来



「平成28年度 子供・若者の意識に関する調査」(内閣府)より作成
調査対象:15~29歳までの男女

なければいけないわけでもありませんが、夕方の事務所はいつも賑やかです。今は150人ほどがプロジェクトに所属していますが、全員が同じ濃度で活動しているわけではありません。学生ならテストやアルバイトなど、社会人なら仕事があるのが当たり前で、強制はしません。その分、メンバーの意

思疎通はオンライン上のコミュニケーションで図っています。当団体には会員のSNS(ソーシャル・ネットワーク)があり、プロジェクトの掲示板に、会議で話合ったことを全て記録しています。なかなか参加できないメンバーも、空き時間にスマホで掲示板をチェックするだけです。またそこに過去の活動記録やノウハウが全て蓄積されていくので、メンバーの入れ替わりがあったときも記録を辿ればすぐに分かります。

SNSは、若者が参加しやすく、継続しやすい環境づくりに欠かせません。リーダー性を求めすぎず
多様性を認める

実は当団体に来る若者のほとんどは、「環境を守りたい」「こんな問題を解決したい」などの明確な目的をもって来ているわけではありません。「友だちに誘われて」「フェスに行ってみようから」などの気軽な動機で来る人のほうが多くいます。でも私はそれでいいと思っています。社会を変えたいと思ったとき、巻き込むべきは確固たる目的をもった人ではなく、あまり社会に関心のない人や、環境問題に興味がない人です。そういう人を集めて一緒に活

動し、一緒に成長できたときこそ、社会が変わります。

これまでにエゾロックを単立していったメンバーが、今、道内あちこちで環境保全団体の牽引役として活躍しています。しかし彼らのほとんどは、エゾロック内で目立つリーダーだったわけではありません。どちらかというと、一歩踏み出すのが遅いタイプが多かったように感じます。「若い人材が少ない」と嘆く団体の多くは、リーダーになる人材を求めすぎているのでしょうか。熱心な人もそうでない人も、歩みの速い人も遅い人もいます。その「多様性」を認めること。そしてすぐに結果を求めるのではなく、ゆっくり全員で前へ進んでいくことが大切だと私は考えています。

もっと若者と対話して
共感を得ることが大切

全員がリーダーでなくてもいい
なんとなく活動に参加してもいい
ゆっくり、小さな一歩でも、
全員が踏み出せば社会は変わる



特定非営利活動法人
ezorock(エゾロック)代表理事
草野 竹史さん

1979年札幌市生まれ。酪農学園大学環境システム学部卒。大学在学中に国際青年環境NGO[A SEED JAPAN]の活動に参加し、2001年、11人の仲間とともに環境団体「ezorock」設立。北海道最大級の音楽フェスティバル「RISING SUN ROCK FESTIVAL」の環境対策活動を中心に活動を展開。大学卒業後、一度就職するが、05年に退職。06年4月からezorock代表理事に就任し、現在に至る。

が経過し、「後継者がいない」という声も聞かれます。「環境に関心がない」「やる気がない」など若者側に原因を探しますが、団体側にも問題があると思います。今まさに環境保全活動に取り組んでいる皆さんは、自分たちの考えを若者に押し付けていないでしょうか。団体側は「守ろう」と熱心に活動しているのですが、それを押し付けるだけでは、若者は「どうして守らなきゃいけないのだろう」と疑問を抱いてしまいます。そうなるのと「やらされている感」が生まれ、活動が続きません。もっと若者と対話してほしいと思います。活動意義に本当に共感できれば、彼らはもっと熱心に取り組んでくれるでしょう。

若者が多い当団体では、経済的な理由や、進学や結婚といった環境の変化などでやめていく人も少なくありません。しかし活動から離れたとしても、エゾロックでの経験は必ずどこかで活